

露 夕(讃州)

いにしへを語れ瀧夜しのふ橋

耕 淵(東都好文軒)

たちはなや老せぬ願ひ人にある

宗 古(西讃僧)

鶯やおしまぬ時か上手なり

雪 峰

蛙なけと山吹の花の歸りけり

湖 仙

春駒やあまんの足の上ほこり

斧 休(越後高田)

三つ着れは三つたけ夜半の厚氷

暇 泉(加賀小松)

笹垣に宵の深雪の崩かな

多 夕(同右)

茶摘や聲なき蝶のいそかしく

自 石(同右)

風のおとさきのふの夏のくさはかな

卵 鳴(同右)

ぬま屋ねに鳥丸ちる吹雪かな

風 逸(加賀津幡)

槇の葉のひまならなくに二日月

魚 洲(東都樵冥庵)

舜の倦れぬほとを盛かな

鯉北齋(洛)

寐耳には水より嘸なほとゝきす

龜淵(蓬萊樓と號す、江左石部龜淵稿とあり。)

あまたなに鼠すゝけて五月雨
賤か手に細き葵のかつらかな

蘆涯(京都、大杏氏、曉臺の高弟。)

みしか夜や寐あまりて我か老をしる

李三(洛東)

行あいの雲にひさなき皁月かな

可笑(加賀小松、竹壽軒可笑)

家圍る松や入江の春かすみ

南臺(加賀小松)

くらきにもなれて夜毎の涼かな

梅布(同右)

山ふみせし時雲の山の草壁にまくらを結ふ

旭むく鹿のやつれや宵の聲

雪泉(東都金龍山下加來庵)

風に鐘佛法流布や花の雲

三尺の草うこくなりほとゝきす

名月や蟲はかくれて松のこゑ

水落(東武)

ふけ行や岡に影おく雪の松

如關子は俳道に心よせられしか。予も此家に足を止めし折から、句を記せと朝夕の進めありしか、元より發句の意味もしらす、只十七文字にならへし而已、句にはならず、只汗水たり、早く仕過は後の笑ひとかならん

骨折つた田草の門や夕涼

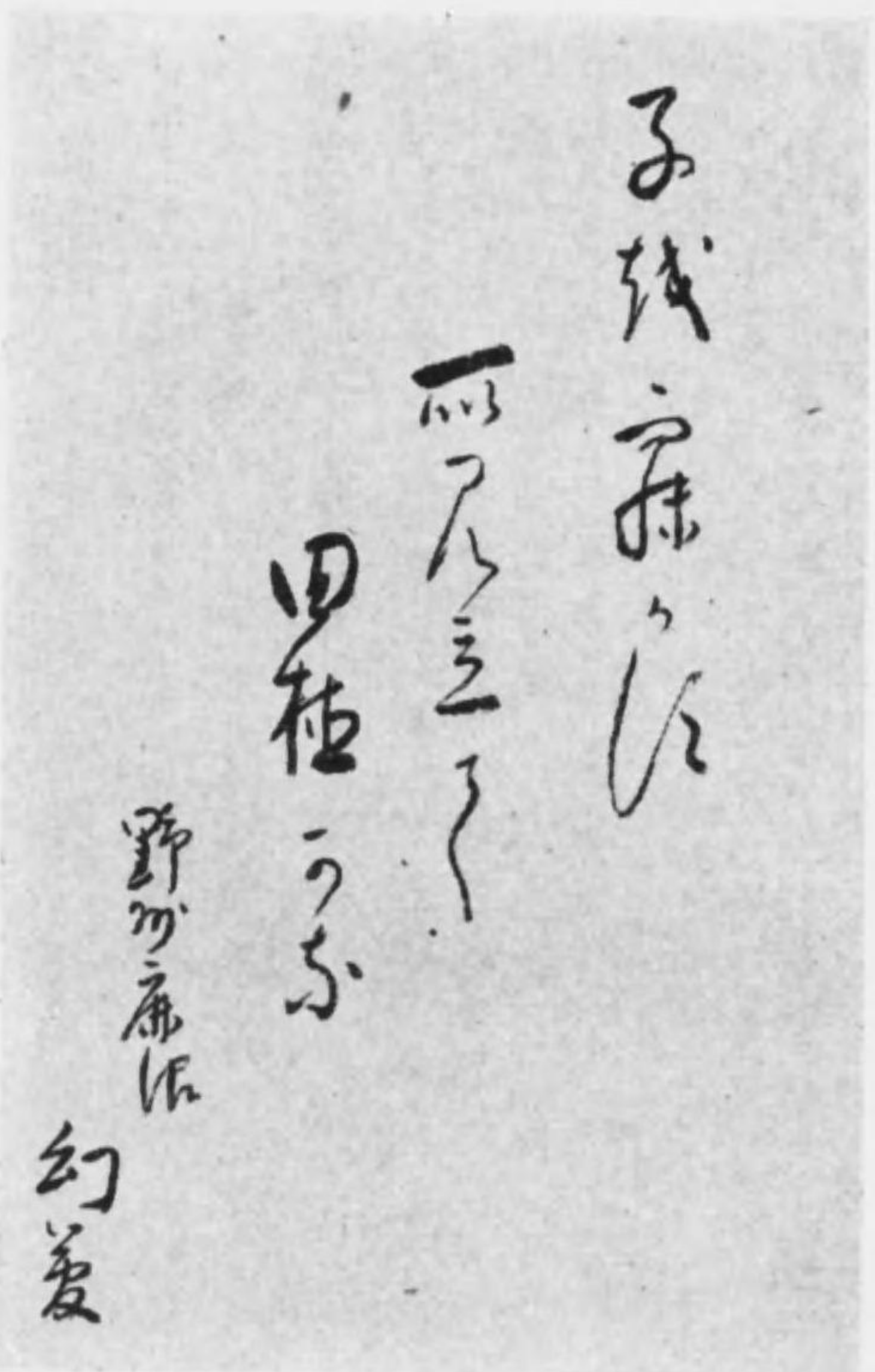
子を寐かす

所見立て

田植かな

野州鹿沼の人

幻夢



子を寐かす

所見立て

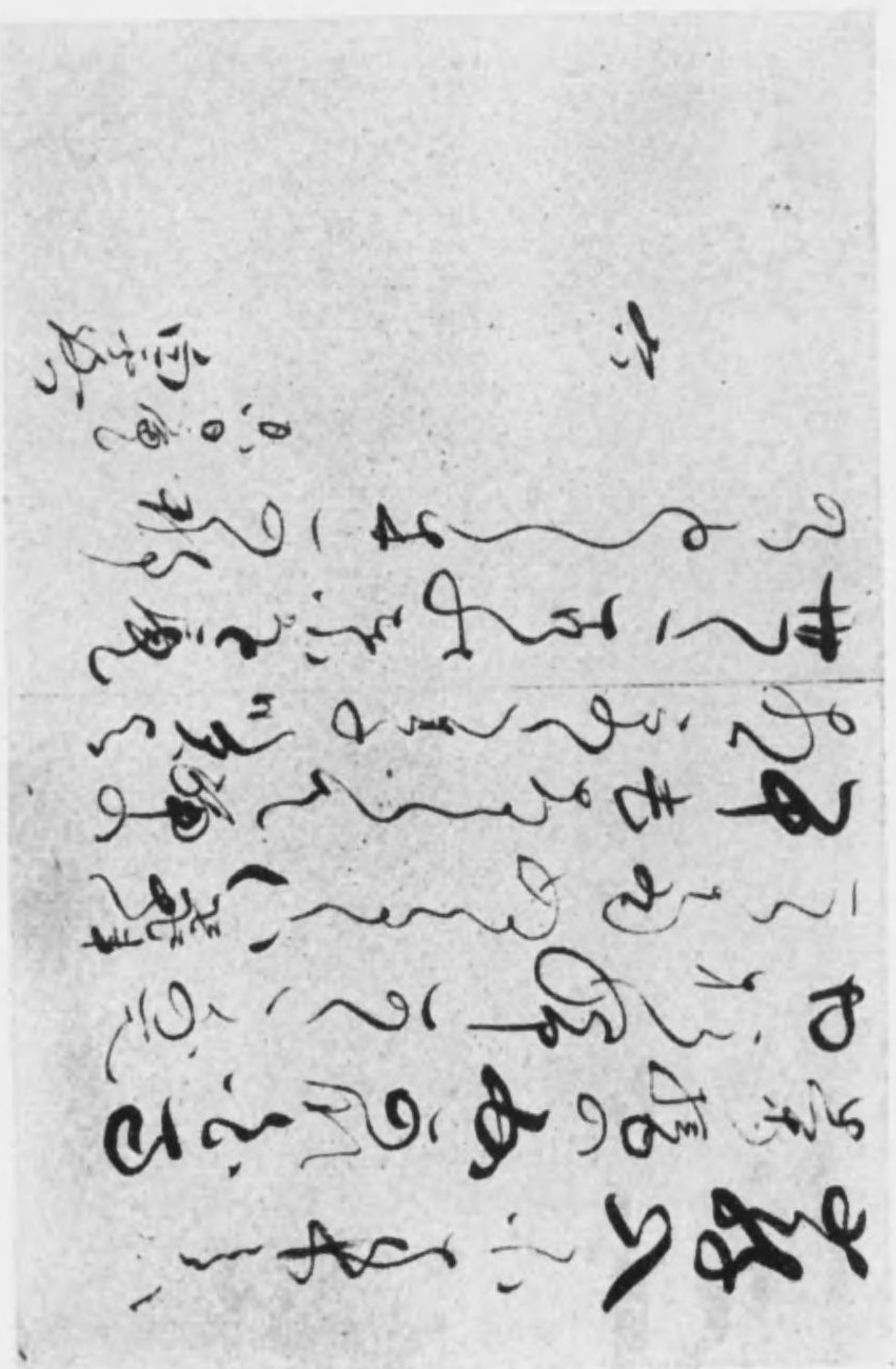
田植かな

幻夢

野州鹿沼の人

藪人に来ては茶摘の女かな
自雨やおふかた外てみなぬるゝ
いひつにもならて踊の夜更たり
吹よせたこの葉を庵のとし木かな

註 とし木は歳木にて、年の暮に積み込んで、春の用意に爲す新のことなり。



其日庵白露
は茶室門下
なり、「俳
論」の著者
り。

白露筆蹟

香は花にとりて梅の夜明哉
八朔や露ははしめて米の秋

秦氏、魯太郎と稱す、雪中庵魯太の門人なり、三
岐、振々亭、雪門等の號あり、著述に「魯太吐月
高點集」、「不自翁句集」等あり。

香は花にとりて

梅の夜明哉

八朔や

露ははしめて

米の秋

雪中庵魯太の

門人なり

三 餘 筆 蹟

姨捨の月に對して
とらぬ月や
田毎の落水
淡路の人、東北
遊と號す。

姨捨の月に對して

とらぬ月や

田毎の落水

青岐

淡路の人、東北
遊と號す。

朝顔も終に尾花の
まねく先 朝顔や
ひとつ咲いても秋の
花 朝顔や三日月の
夜の明たれは

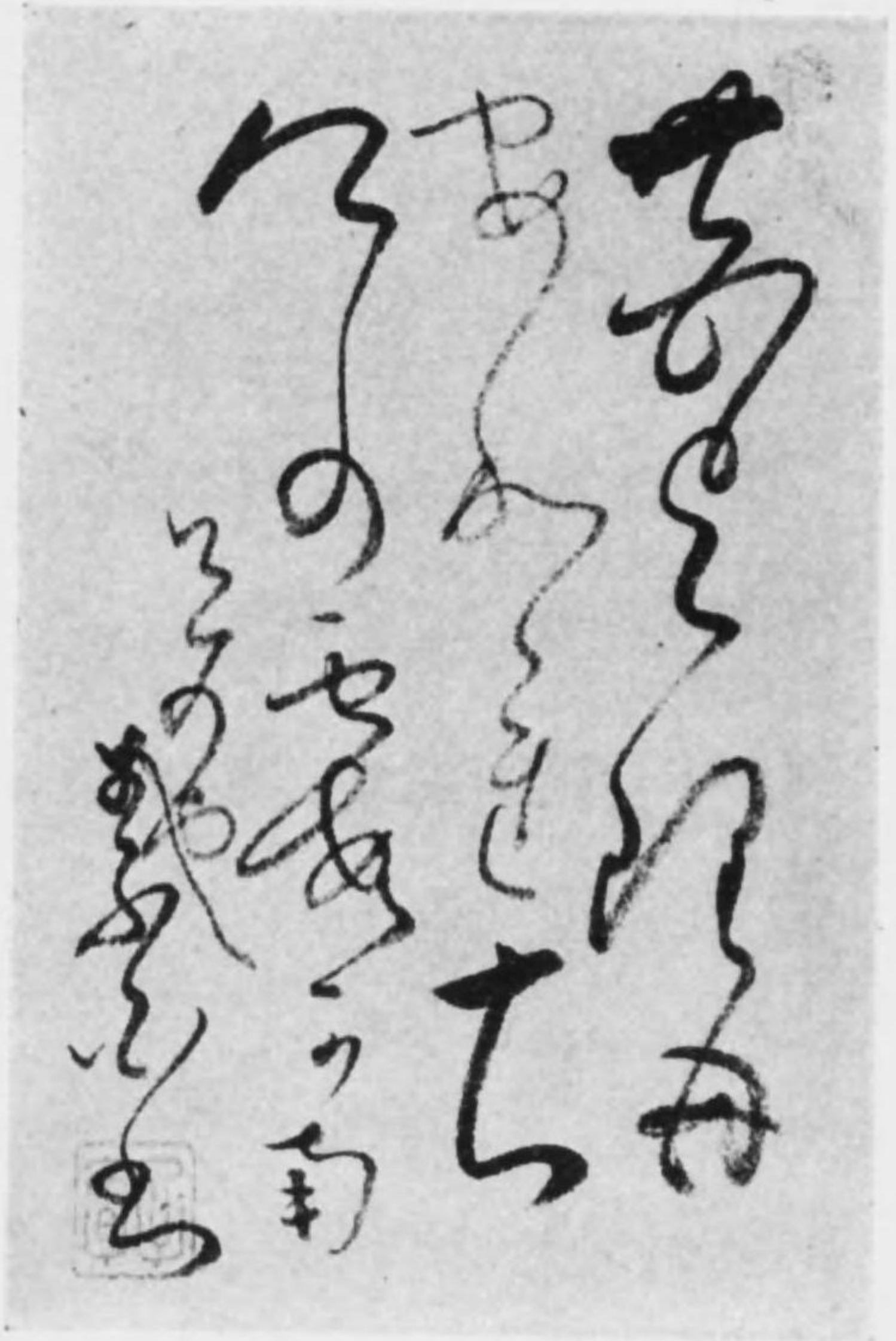
朝顔も終に尾花の
まねく先 朝顔や
ひとつ咲いても秋の
花 朝顔や三日月の
夜の明たれは

嵐外

關更の門人なれども曉臺、可都里等にも師事す、辻氏、南無庵北亭と號す、弘化

二年三月二十六日歿、享年七十五、甲府に住す、「嵐外發句集（二卷）」の著あ

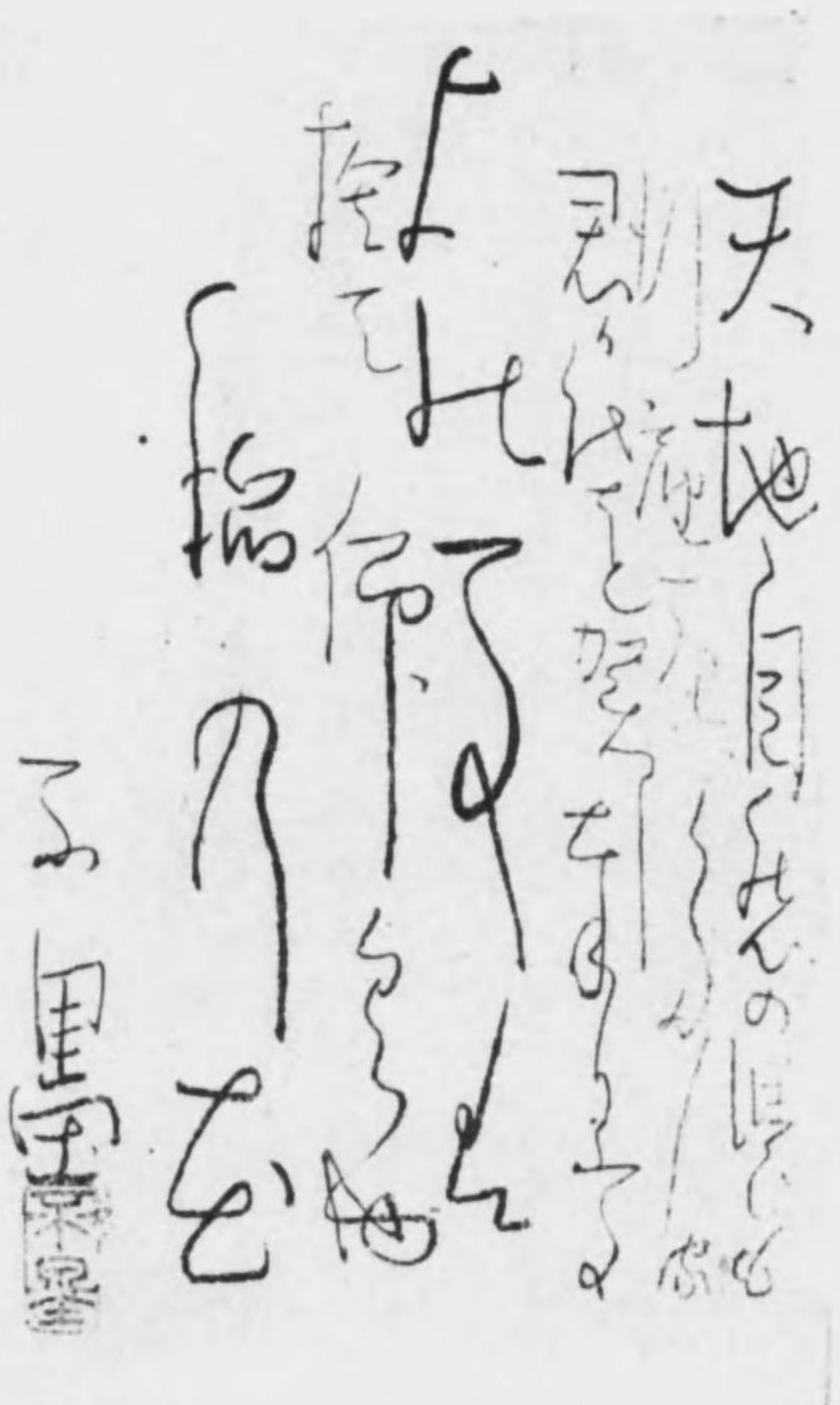
り。



花よりも
あわれ古
郷の霞かな

素白

菊地氏、其日庵素
丸の高弟、「その
や」と號す。



天地自然の潤ひも
行届きたる
君か代を賀し
奉りて

よの事は
捨てて仰ぐや
稻の花

夢幻斗入

すすしさをおなし水行人のふね
示 芳

何事そ白きも虚の霜はしら
魚都里(鈴木魚都里、重春、越後高田藩士)

七種は月夜の音のはしめかな
う 万人

月花になかめ明してその果は一物なしのものと素人
蘇 山

行雁や今宵も雨すみた川
士 祥

女郎花吹もをられぬ日數かな

貞 秀(霜室)

鹽の家のかすみたててや松葉焚

鶯 中

試に馬ひく里や梅の花

飲 河(越後高田)

酔さます空を祈らは柳かな

甘 雨(吉田氏、越後高田)

ちさくても河はさわかしうめの花

那 久 禰

いつの代の色に染しそ楳はな

左 角(坂部左角、越後の人、蝸牛園左角と號す、俳人なり。)

高あかりするや波古便良翠簾のうち

漢く天地の聲有
やまとにあめつちの
よみ(註讀方)あり 其中に人
ありて 能識能言
へとも おのれを高ふれ
は 一步も進みかたく
他にしたかへは 萬里も
心のまゝなり さはその
自在を得るといふは
國字にふきやまふき

蜀魂杜鵑のかとかと
しきも ほととぎす
の五文字に 理屈(マ、)を
はなれ 敗醬の悪
嗅(マ、)も おみなへしの
なよやかにならひて
大倭のここの葉に
あそふものを 誠に
大道の俳諧師とは
いふへからく而已

明和二年西曉夏
上九日於瓢庵
雲水僧既白序

漢に天地の聲有

やまとにあめつちの

よみ(註讀方)あり 其中に人

ありて 能識能言

へとも おのれを高ふれ

は 一步も進みかたく

他にしたかへは 萬里も

心のまゝなり さはその

自在を得るといふは

國字にふきやまふき

の書そこなひもなく

蜀魂杜鵑の かとかと

しきも ほととぎす

の五文字に 理屈(マ、)を

はなれ 敗醬の悪

嗅(マ、)も おみなへしの

なよやかにならひて

大倭のここの葉に

あそふものを 誠に

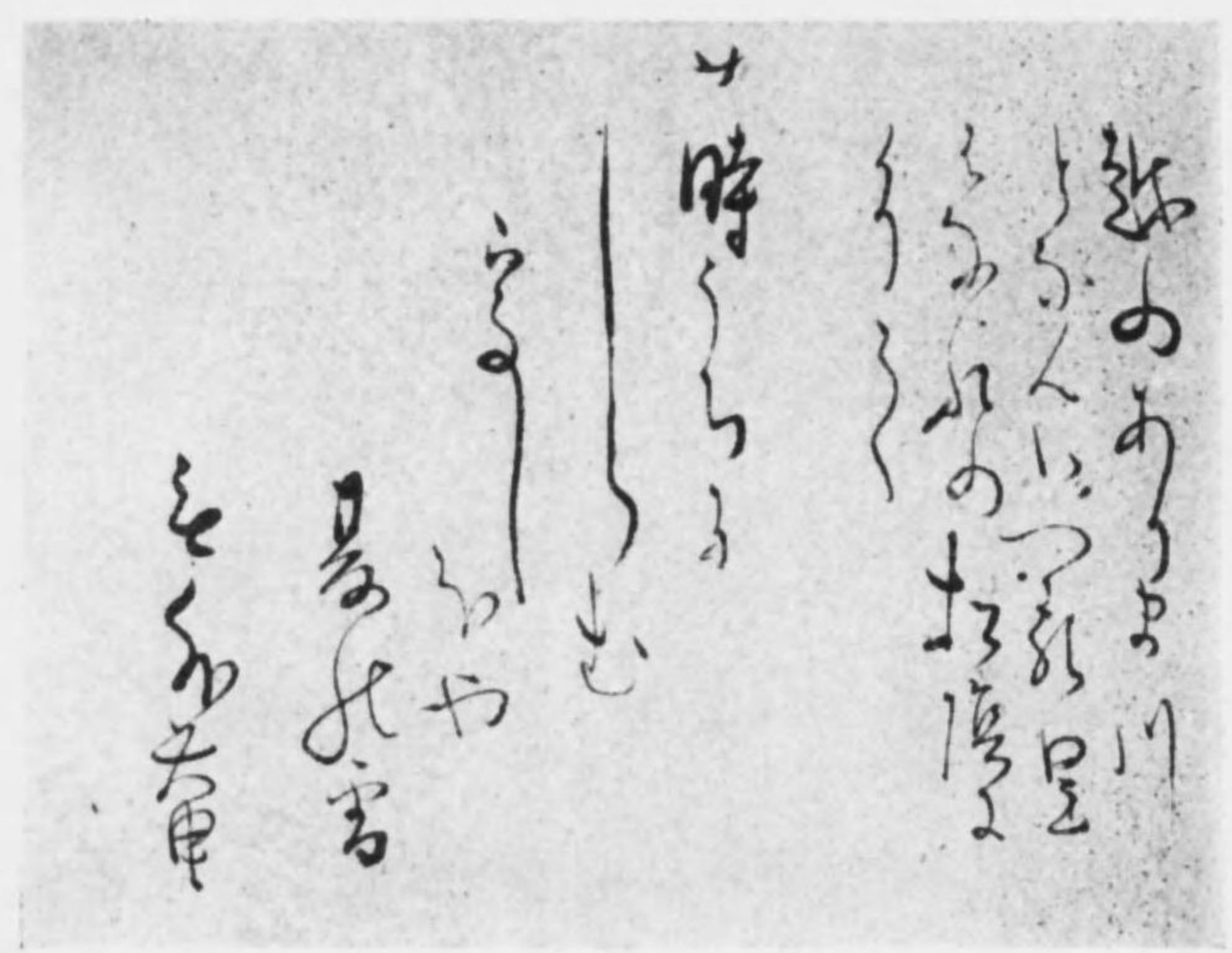
大道の俳諧師とは

いふへからく而已

明和二年西曉夏

上九日於瓢庵

雲水僧既白序



越のありま川
となんいへる里
はなれの松蔭に
かゝりて

蒔うち
しらむ
うしほや
夏の雪

無外庵 (既白)

既白は金澤の僧にして又俳人として名あり、希因の門人なり、無外庵、雲水房等の號あり、千代尼句集、續千代尼句集、蕉門むかし話、正門昔語集、うもれ木、やぶれ笠等の著あり、關更、蝶夢、馬來、後川、東大、栲良等は皆既白と共に希因の門に出づ。

蘭 叢

年々歳々に、諸君の佳吟を乞ふとて、此一帳をもて、予ニ愚語を求む、元よりい
なにはあらぬ稻舟を、思ひを寄て爰に歳々年年々の笑ひをうくる事とは成ぬ

思ひ出し思ひ出しては五月雨や

一 舞、

はるの雁いつとはなしに忘たり

左 琴 (室左琴、越後高田藩中)

朝顔は権に似ても哀れなり

薜のぬれて咲く垣根かな

(註、咲くははなさくと讀ませる)

朝顔の葉にはさまるも咲りかな

明 月

春風や水をはなるる事二尺

徴 雅 (夏目庵)

蜘蛛の巣にくめは留主なり露しくれ

玉 斧

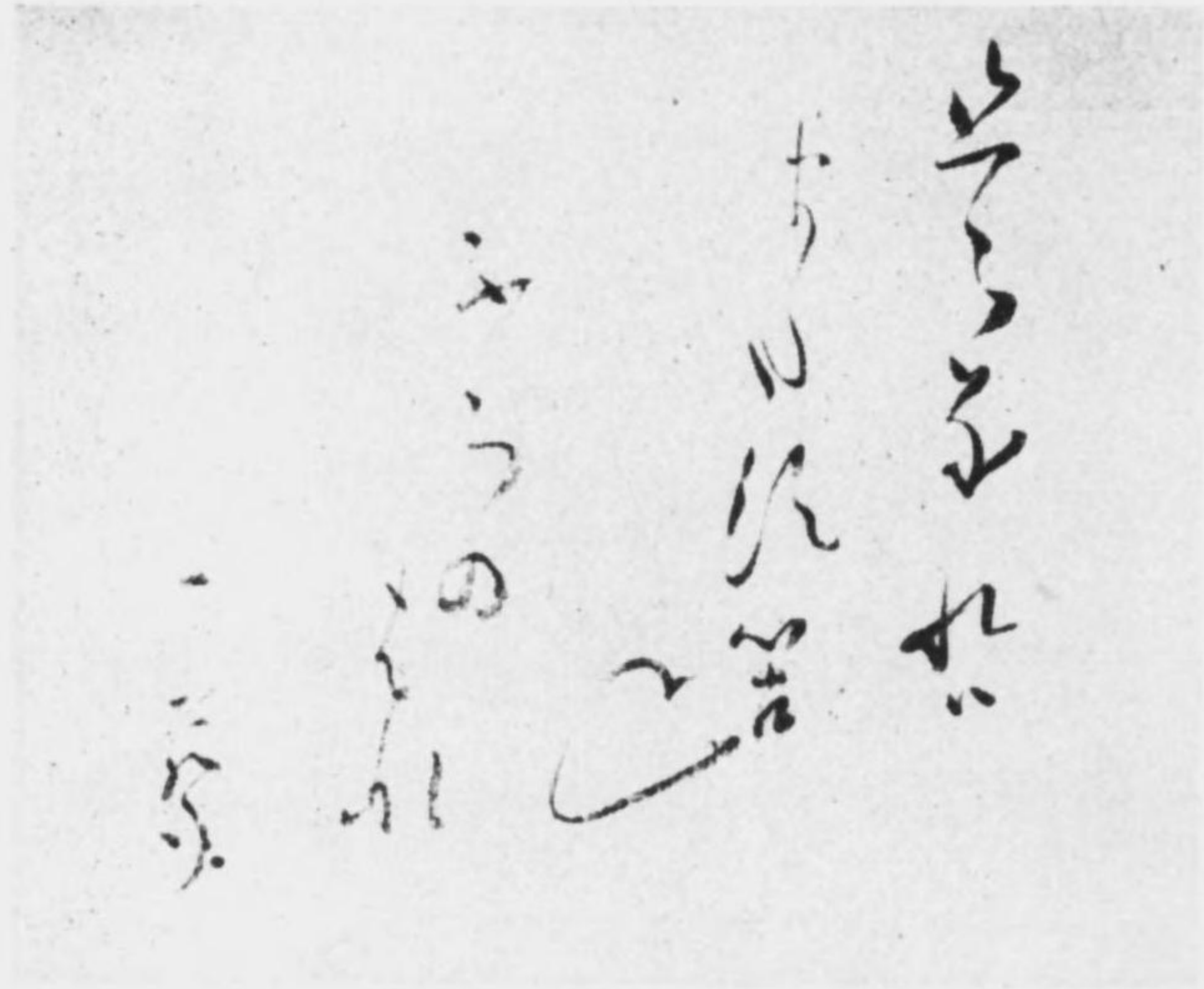
水に入一葉も星の手向かな

尺 五 (東武)

雪の日やいくつも橋のわたりそめ

恵 古 (一音房と號す、又嚏居士の稱あり、「さびしをり」「瓜の實」の著あり。)

すみよしの岸にわするる扇かな



是なれは

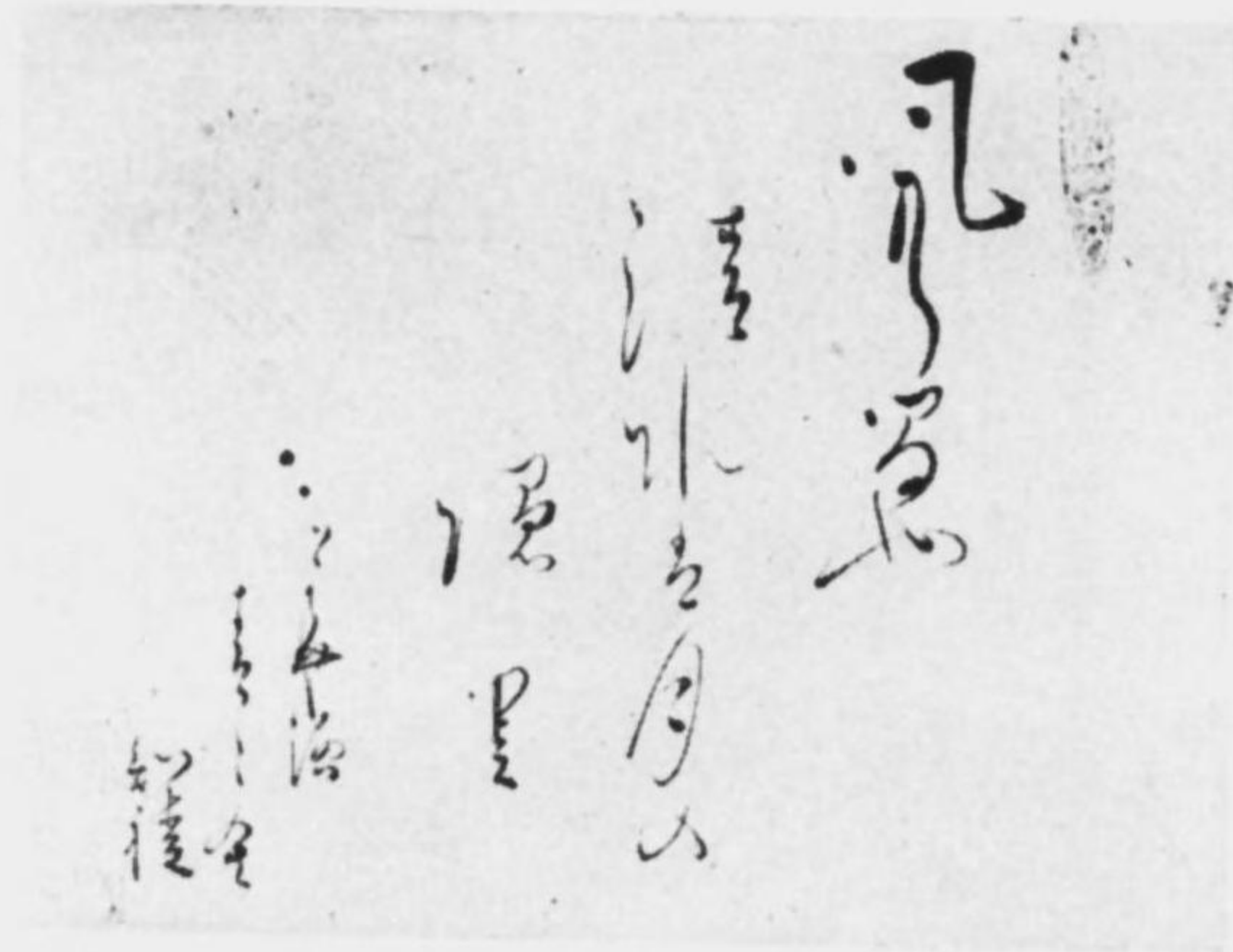
またす筈

なり

ふちの

はな

一 聲



風の間や

清水は月の

隠れ里

知 積

華洛青々舎の號あり、俳
家奇人傳三續俳家奇人傳
三。



門へ出て
我家を
そしる
すゝみ哉

玄武坊

玄武坊

廬元坊の門、江戸の人、初め鱗甲と號す、一碗亭、青白子、應一武者、俳仙堂、
白山老人等の號あり、水野氏、後神谷氏に改む、寛政十年一月十九日歿、享年
八十、江戸駒込白山下に住す、玄武坊門下より青羅、玉屑等、多くの逸才出づ。

龜 風(華洛、巨牙園)

蜂 隠す雲かなもかも雲の峰

千 隣(小城)

追分にふたところありおみなへし

羅 嵐(加賀の人)

黄鳥のみたれて竹の落葉かな

似 鳩 房(大阪の人なり、似空門下、飄堂、亞堂の號あり、寛政九年十二月二十三日歿、享年八十。)

鶏頭のちらぬも秋のひとつかな

文 梅(金澤の人)

火を戀ふるあしたのさまや夏の虫

路 因

蓮池に一葉朽るや今朝の秋

似 水(洛東)

舟からも苦のうこくや郭公

北 魚(洛)

夏川やわたる見て居る渡しもり

大 賦

黄帝のいかりほとけて雨すすし

青 谷(洛加茂西岸)

日さかりや田の草取の唄遠し

露 町(上毛、草秋庵)

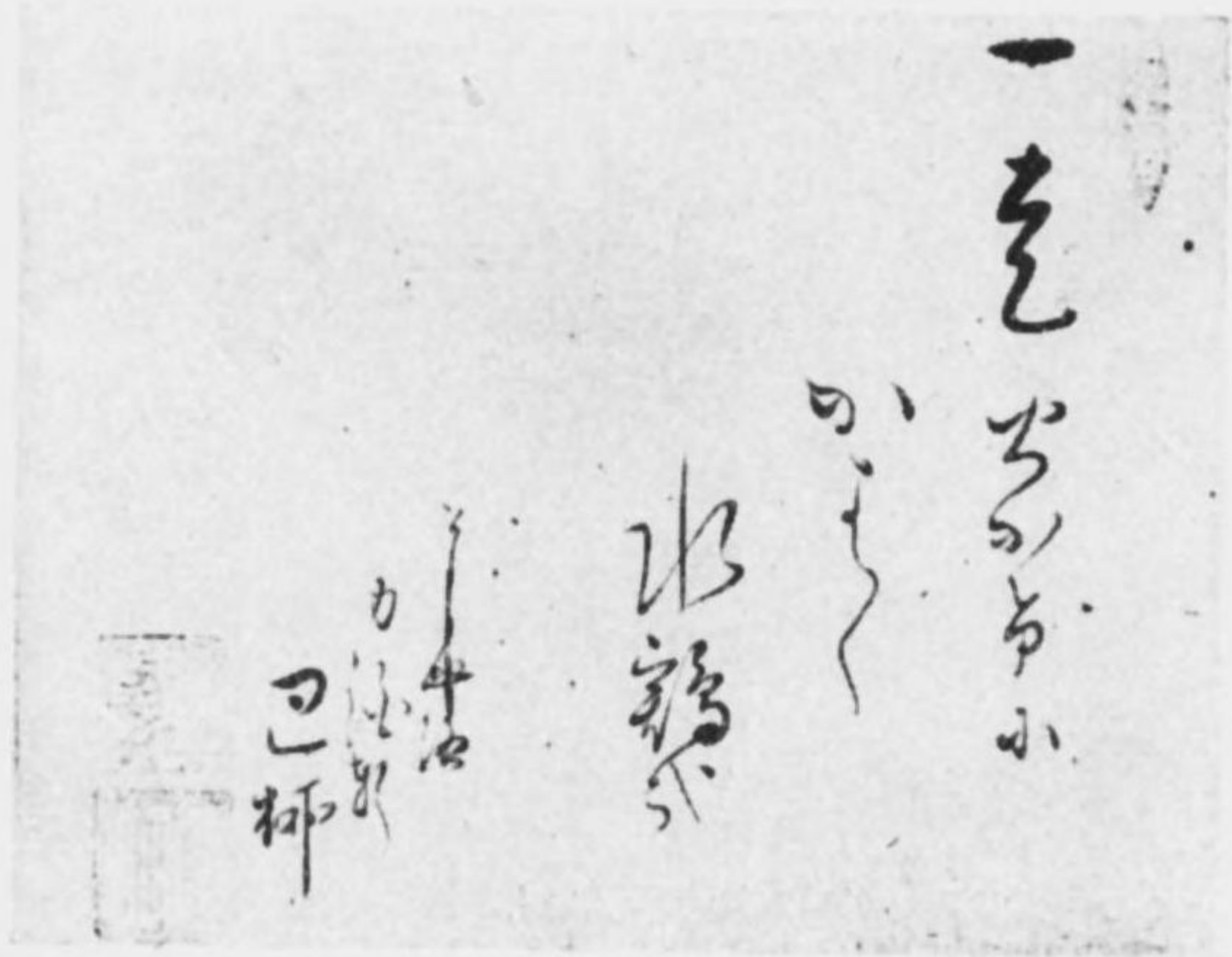
遠乗は生たを見たり初經

正 人(華洛、露樹亭)

白雨や雨の袋のしやらほとけ

(註) しやらはス、リトの意なり、ほとけはホドケ即ち解けることなり)

巴柳(華洛力泊軒)筆蹟



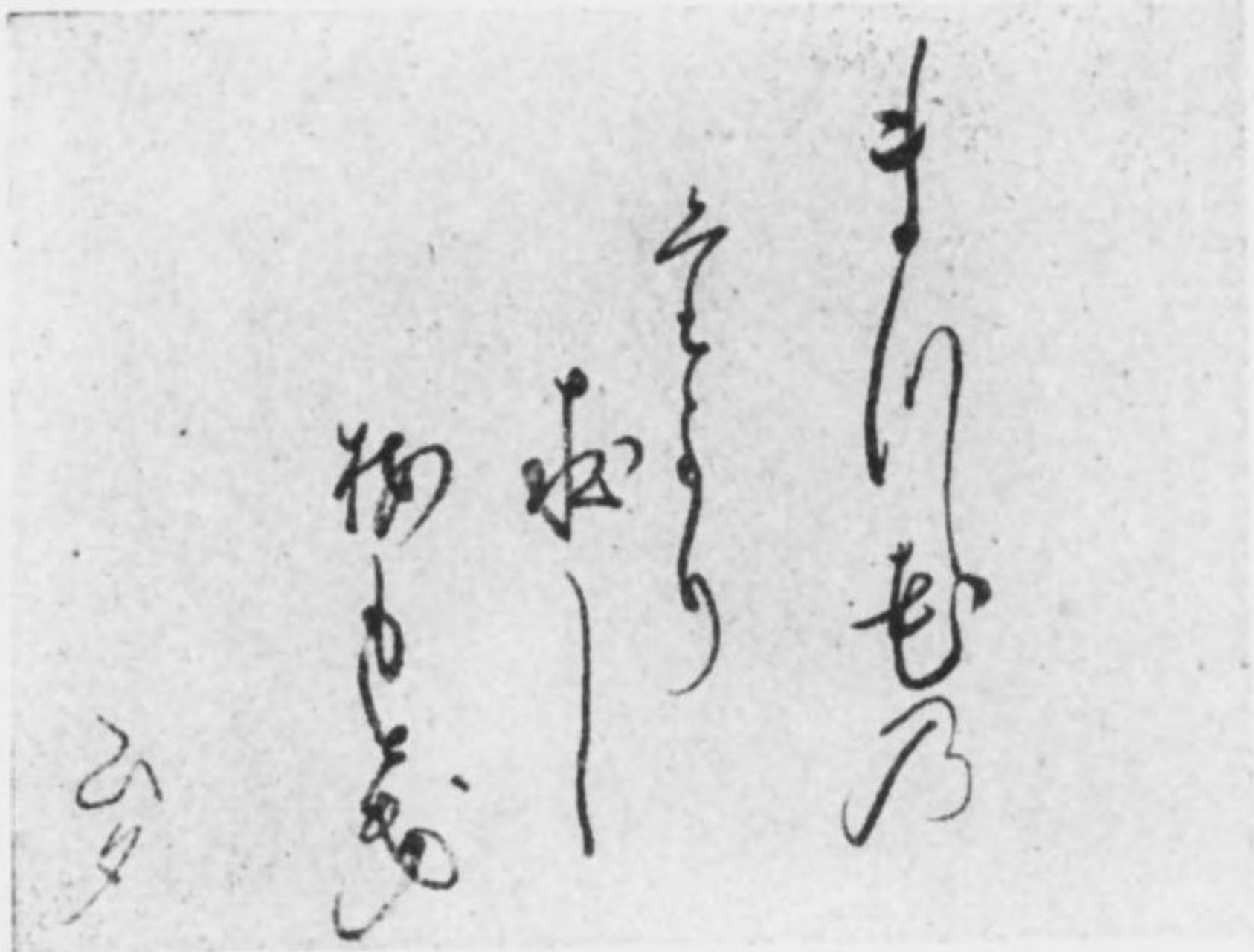
一九六

一 走火かけに

かはく

水鶏哉

蹟山夕筆



一九七

まつ花の

たより

求し

梅もとき



鳴鶴の
ここにも
家の有理し
かな

雄
啄

白雄の高弟たる倉田葛三の門人なり、葛三の後を承けて大磯鳴立庵を嗣ぐ、初代
三千風より八代目なり、「雄啄日々稿」「葛三句集」の著あり。

鳥 秦 坊

秋のくれ琵琶ひくも我聞もわれ

雨 月

夜もすから鳴ぬ聲聞水鶏かな

宜 甫 (洛)

香のなきは水の手柄やかきつはた

無 底

冷風や床に二ふくの軸の音

山 夕

まつ花のたより求し梅もとき

紅 桂

白露のそのいろいろを紅葉かな

松 崖

池水に月も動かぬ暑さかな

安 里 (洛)

あつき日や鳥はぬれてさされ水

李 完(洛)

百日紅咲や不動のうしろ堂

青 野(洛)

涼しさや何見て魚の翻へり

昭和十八年十月廿五月初版印刷
昭和十八年十月三十日初版發行

(出文協承認)
あ310026號



發行所

株式會社 湯川弘文社
大阪市南區順慶町通一ノ五三
振替大阪七一三九七番
會員番號一三七五〇一番

著者

俳人遺墨
定價參
特別行爲稅相當額拾五
合計參圓拾五
送料金十五錢
金子健二

發行所

大阪市南區順慶町通一ノ五三
湯川松次郎

印刷者

大阪市北區南錦町四六
今村繁三郎

印刷所

大阪市北區南錦町四六
新日本印刷有限公司
(西大七四)

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

968
70

終

